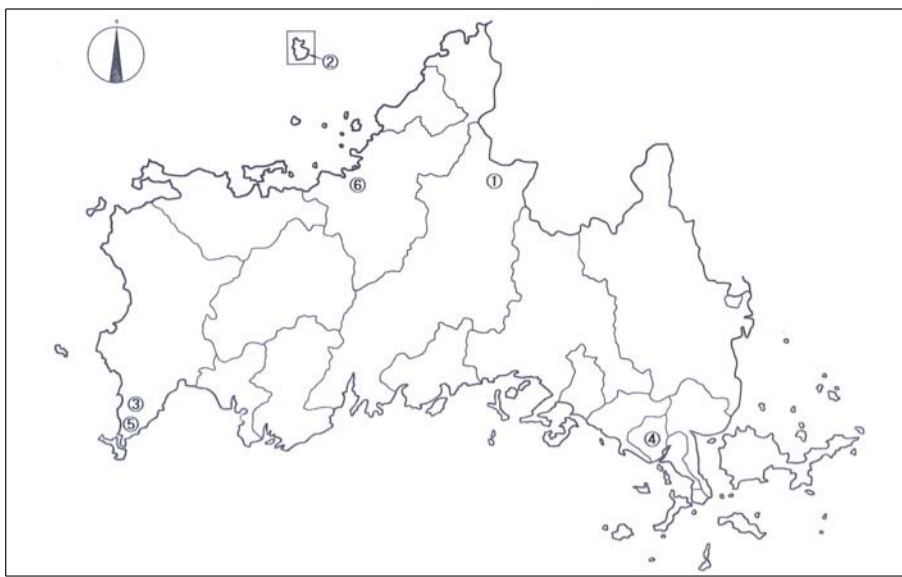


センター所蔵の
県指定考古資料展



会期：平成22年9月6日(月)～平成23年3月4日(金)



△遺跡の位置図

番号	遺跡名	所在地	主な時代	種別	主な遺構
①	宮ヶ久保遺跡	山口市阿東徳佐中宮ヶ久保	弥生時代	集落跡	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝 弥生土器、石鎌、石斧、紡錘車、木製品
②	見島ジークンボ古墳群	萩市見島片尻	奈良時代～平安時代	埋葬跡	内部主体＝横穴式石室の退化型式と見られる 須恵器、土師器、緑釉陶器、鉄鎌、石鈿
③	綾羅木郷台地遺跡	下関市綾羅木明神	弥生時代	集落跡	貯蔵用竪穴、土坑、溝 弥生土器、石鎌、石剣、石包丁、人面土製品
④	明地遺跡	熊毛郡田布施町大波野明地	弥生時代～古墳時代	集落跡	竪穴住居跡、土坑、溝、墓 弥生土器、土師器、石鎌、分銅形土製品
⑤	武久浜墳墓群	下関市武久町	弥生時代～近世	埋葬跡	箱式石棺墓、石蓋土坑墓、石囲墓、土坑墓 弥生土器、半両銭、ガラス小玉、磨製石剣
⑥	郡司鋳造所跡	萩市椿東無田ヶ原	江戸時代	鋳造所	粘土貯蔵遺構、炉跡、大砲鋳造石組遺構 鋳型、溶解炉(こしき炉)、埴塼、陶磁器

△遺跡一覧表

財団法人山口県ひとつくり財団・ TEL. 083-923-1060 FAX. 083-923-2001
山口県埋蔵文化財センター E-mail=y-maibun@fancy.ocn.ne.jp
〒753-0073山口県山口市春日町3番22号 HP=http://www.y-maibun.jp/

宮ヶ久保遺跡出土木製品

山口県指定：昭和58(1983)年9月27日

宮ヶ久保遺跡は、山口市阿東徳佐の水田下から発見された弥生時代中期を主体とする典型的な単位集落遺跡である。ほ場整備事業に先立ち昭和51(1976)年度に山口県教育委員会が実施した発掘調査により、この集落を囲郭する大溝から多量の木製品が発見され著名となった。

木材は元来、永く地中に埋没している状態では腐朽し遺り難い有機物である。しかし、この遺跡は地下水位が安定して高く、常に水没の状態にあった。このため木製用具の原形を良くとどめて、その性格や形状をつぶさに知り得ることが可能であったことは稀有である。

その内容は農具・工具・日用什器・紡織具・狩猟具・祭祀具・建材など弥生時代の木製用具のほとんどすべてにおよんでおり、また、金属製武器を模倣した戈・手戟のほか蛙・鳥・猪を形どったきわめて珍しい木製品が含まれるなど、質・量ともに全国的に有数の資料である。

弥生時代における木器文化の全容をうかがい知る上で貴重であるのみならず、当時の生産・技術・社会生活全般にわたっての解明に具体的に寄与し得る重要な資料であるといえる。



△木製品出土状況



△蛙・鳥・猪

見島ジークンボ古墳群出土品

山口県指定：昭和59年(1984)年4月10日

見島ジークンボ古墳群は、萩市沖の日本海上に浮かぶ孤島見島に築造された積石塚の群集墳である。その位置的な特殊性と、奈良～平安時代にまたがる時期の質的に高い豊富な副葬品を有する一大墳墓群として歴史的価値を評価され、昭和58年(1983)年に国の史跡に指定された。

この古墳群から発見された副葬品は昭和53(1978)年に県指定になったが、今回展示するものは昭和57(1982)年度の山口県教育委員会による発掘調査によって新たに出土し、追加指定されたものである。

とくに注目されるのは、石製帯飾り類と鉄鎌である。石製帯飾り(石鈿)は、当時の役人階層が身につけた装身具である。「衣服令」の規定によると、これらはその型式からほぼ七位の官位に相当するとみられている。また、鍍金された裏金具が一对となって遺っているものがある。これは全国的にもきわめて稀で、精巧な当時の工芸技術の水準を知る上で貴重な資料である。

鉄鎌はいずれも大形品で、大弓をもって引く儀器的な性格が強く、孤島見島に葬られた被葬者たちの実像を推慮するに欠かすことのできない遺物である。



△遺物出土状況



△石鈿帯

綾羅木郷台地遺跡出土の人面土製品

山口県指定：平成3(1991)年4月5日

下関市綾羅木におけるほ場整備事業に伴い、山口県教育委員会などが昭和63(1988)年度に実施した綾羅木郷台地遺跡明神地区の貯蔵用堅穴から出土した。炭や焼土を伴うが、土製品自体には火を受けた痕跡がみられない。

人面土製品は丁寧にヘラ磨きされた棒状の本体(長さ7.8cm×直径4.1cm)の上部に人頭及び人面を表現しており、面の装着を思わせるように全体が浮き上がっている。顔は眉の表現はないが目と口を窪ませ、鼻と耳は立体的に作られている。鼻は大きくて高く、両耳には2孔が穿たれている。頬には入れ墨を表現したとみられる左右対象の同心円文を施すなど、細工はきわめて具象的である。

その具体的な用途は不明であるが、同じ貯蔵用堅穴から発見された陽物状石製品とともに農耕儀礼などに伴う祭器の可能性が高い。

この人面土製品は、弥生時代人を表現した絵画・彫刻資料としてわが国最古級のものである。また、入れ墨を施した顔などの表現はきわめて写実的であり、弥生時代人の形質や習俗などを知る上で貴重な資料である。



△人面土製品出土状況



△人面土製品

明地遺跡出土の分銅形土製品

山口県指定：平成9(1997)年12月12日

この分銅形土製品は、ほ場整備事業に伴って山口県教育委員会などが平成5(1993)年度に発掘調査を実施した明地遺跡(田布施町大波野)の土坑から出土した。大きさは最大長21.8cm、最大幅16.4cm、最大厚3.1cmの板状を呈する。上半部の片面には顔面が表現され、上半部下端には左右対称な位置に各々2孔が貫通する。上半部と下半部の間のくびれた部分で折損している。

分銅形土製品は現在までに全国で300例近くが発見されているが、そのなかでこれは最大のものである上、良好に原形を保っている。全体的な形態や眉の端部が側面におよぶ点などが伊予(現在の愛媛県地方)の分銅形土製品と共通する特徴であり、周防・伊予の地域間交流をうかがわせる。また、端正な顔面表現は表情豊かで、造形品としても秀逸である。

また、出土状況からみて祭祀行為に仕様された後に二つに折られ、裏向きで土坑に埋納されたと考えられる。こうした出土状態は特異であるといえるが、いずれにしても、この資料はわが国の分銅形土製品を代表するもので、弥生時代の人物像としての価値も高い。



△分銅形土製品出土状況



△分銅形土製品

武久浜墳墓群出土品

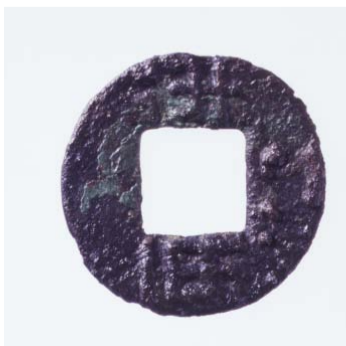
山口県指定：平成15(2003)年12月19日

武久浜墳墓群は、下関市武久町の海岸砂丘上に立地する。国道建設に伴い、平成13(2001)年度に財団法人山口県教育財団(現 ひとつづくり財団)が発掘調査を実施した。これにより弥生時代中期を中心とする箱式石棺墓11基などが検出され、副葬品(半両銭1・ガラス小玉5・磨製石剣1)や供献品(弥生土器)が出土した。

半両銭は青銅製で、直径2.2cm、孔径0.9cm。半両銭は、紀元前3世紀後半～紀元前2世紀後半(秦～前漢代中頃)まで鑄造された。これまで国内の弥生時代遺跡において半両銭は本例を含め5遺跡から出土しているが、そのなかでこれは唯一副葬品であることが明らかかなものである。ガラス小玉は直径4mm、厚さ3～4mm。磨製石剣は泥岩製で、下半部が欠損する。残存長は6.5cm。

弥生土器には、北部九州系と在在系がある。前者は器面に赤色顔料を塗布し、丁寧に磨いた精美なもので、北部九州から直接持ち込まれた可能性が高い。

これらは土井ヶ浜遺跡をはじめとする響灘沿岸地域に展開する弥生時代墳墓群の特徴や消長、大陸を含めた他地域との交流関係を知る上で貴重な資料である。



△半両銭



△弥生土器出土状況

郡司鑄造所跡の鑄造関連出土品

山口県指定：平成20(2008)年5月9日

郡司鑄造所跡は、萩市椿東無田ヶ原に所在する近世の鑄物工房跡である。郡司家は江戸時代において防長二か国を代表する長州藩お抱え鑄物師の一族で、農耕用具や仏具などのほか、兵器鑄造にも深くかかわっていた。

県道建設に伴い平成12～13(2001～2002)年度に財団法人山口県教育財団(現 ひとつづくり財団)が実施した発掘調査により、江戸時代前期から幕末期にかかる鑄造関連資料(鑄型及び関連品類・溶解炉及び関連品類・鑄造製品など)が出土した。

そのなかには幕末期の四国連合艦隊による下関砲撃事件(1864年)で長州藩が実戦に使用したとみられる西洋式大砲や、砲弾などを生産した鑄造関連品が含まれる。これらは幕末・維新期に大きな役割を果たした長州藩が自力で西洋技術導入に取り組んだ先進的な側面を示し、当時の軍事産業の実態を伝える貴重な資料である。

また、出土品の主体は大砲鑄造などの基盤となった鑄物師の鑄造技術や生産工程を具体的に伝える江戸時代全般にわたる多様な鑄造関連一括資料であり、質・量とも県内はもとより全国的にみても高い価値を有している。



△遺物出土状況



△溶解炉(こしき炉)